

青春の旅

田中澄江



青春の旅

田中澄江



のびのび人生論 8

のびのび人生論 8 **青春の旅**

昭和53年10月印刷 昭和53年10月発行

定価 900円

著者 田中澄江（たなかすみえ）©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 **ポプラ社**

160 東京都新宿区須賀町 5 振替東京4-149271

印刷 新興印刷製本株式会社・有限会社トラヤ印刷所

製本 大成紙工業所

はじめに

旅に出よう。

若い日にこそ旅に出よう。

自分一人で自分の時間を十分につかつて。旅は若ものたちに、まず、他人の存在を教える。

ところが、名も知らない他人。ふだんつきあったこともない、口もきいたこともない他人。

しかし、旅に出たら、他人に時間や道やクスリや、食べものやなど、いろいろのことを聞かなければならない。

他人と同じ船に乗り、列車のベッドの上下になり、ときには、旅館で一つ部屋へやになることもある。

他人とどの程度のつきあいをしたらよいか。他人を理解するにはどうしたらよいか。他人にくまれないため、危害きがいを加えられないため、どのように口をきき、どのような態度でいたらよいか。旅はそのような心づかいを通して、若ものたちに人間勉強をさせるのである。

昔のひと言った。

「かわいい子には旅をさせよ」

子どもがかわいいと思つたら、家の中でかわいいかわいいと大事にして、何もさせないよりは、

旅に出て、自分のことは自分でさせるがよい。少しこわいめにあって、この人生のおそろしさを知らせるのもよい。

しかし、旅はあくまでも、自分を育てるためであって亡ぼすためではない。

「旅の恥^はじはかき捨て」

という言葉がある。

旅先で、だれも知らないから、何をしようとかまわない——もしもそんなことを考える若ものがいたら、人間としてだれに対するよりも、自分自分に対して、恥ずかしいのだと思ってもらいたい。

旅先でも、家の中でも、人間であれば、自分の良心が、あなたをちゃんと見つめているはずである。

旅のたのしさは、また自然との出あいにある。

美しい山。美しい川。美しい丘。美しい村。美しい海。美しい湖。美しい池。

私はヨーロッパに旅をし、アメリカに旅をして日本は、それらのどの地方よりも美しい風景をもっていると思っている。

自然はたしかに破壊されたけど、しかし、まだ、美しい自然はたくさん残り、それをまもってゆくのが、現代を生きる私たちの使命だと思っている。

何故、自然はまもらなければならぬのか。自然によって人間は、その美しさを吸収しながら、絶えずその心をみがいてゆけるからである。

いざゆかむ ゆきてまだみぬ山を見む

このさびしさに きみはたふるや

一生をかけて旅を愛した歌人若山牧水は、このように願った。未知の大地へのあこがれ。それだけが人間の生甲斐をささえる——この歌はそう告げているようだ。

旅に出よう。

旅は見知らぬ町の、見知らぬ山の、野の、湖のいろいろな眺めの中に自分をおくことで、自分のびのびと解放される。

のびのび。

そうだ。いつもいつもくよくよと思いつめたり、心配したり悩んでいることの多いひとほど思いきって、旅に出ることをおすすめる。そのとき、ふだんの自分を忘れて、生き生きとした新しい自分が、のびのびと顔を出して、あなたに挨拶するでしょう。

——やった。旅に出て、生きかえったよ。

一九七八年

田中澄江

青春の旅 もくじ

はじめに

プロローグ 私は青春の旅に学んだ

10 若い時にこそ旅を

山と人生

26 人生に何を求めるか

32 野の草

37 キリシタン悲劇の跡と聖泉
あと せいせん

46 頂きを求める心
いただ

55 二月の頃



ヒメカズラ

旅と人生

60 いやなおじさん

64 阿寒^{あかん}とアイヌ

71 春の山で待つもの

76 七百五十年も燃えている火

85 旅に求めること

93 歩く

97 ひとり旅

101 日本人がいやになるとき

110 五人の平家物語の女性

123 旅であつた人たち



コミヤマカタバミ

花と人生

130 旅で見つけた花たち

135 尾瀬おぜの花たち

137 初秋の山と花たち

140 なぜ花をとるか

152 御仏みほとけは花たちにつつまれて

163 庭の花

169 木の名、花の名

175 霧につつまれたヤナギランの丘

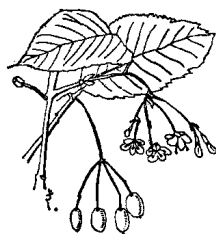
町と人生

182 異国の町の花たち



ハナカタバミ

220	216	213	210	207	202	196	193	190	187
現在をよりよく生きる	旅で教えられたこと	はるかなる年	日本の暮らしにくさ	手紙	人生に必ず かなら 春はくる	若ものたちと親と	白い杖 つえ の人たちのために	すみません	ひばりの声も聞こえない



オトコヨウゾメ

デザイン——堀木一男
表紙イラスト——泉谷久美子
イラスト——三田 恭子

ブローケ

私は青春を旅に学んだ



ミズギボウシ

若い時にこそ旅を

若い日の心というのは、いつもゆれ動き、いつもそこはかたない思いにかきたてられ、不安で、はじめに思えてやりきれなかったような気がする。

だれも自分を理解してくれず、親も友だちも自分から遠いところにいる。夜空の星を見ても、水の流れを見ても、はずかしいほどすぐに涙がでてきた。

そんな時、自分を一番なぐさめてくれたのは、いろいろの詩集や随筆であつた。

東海とうかいの小島いその磯いその白砂しろすなに

われ泣きぬれて

蟹かにとたはむる

石川啄木いしかわたくぼくのこの歌がむしように好きでならなかったのは、十四・五歳のころである。

頬ほにつたふ(と)う

なみだのごはす(ち)

一握いちめくの砂すなを示ししひとを忘れずわす

その歌集は『一握の砂』と名づけられ、初版は明治四十三年の暮れであつた。

私が読んだのは大正の末期だから、もう十年も、若者たちの間に愛読されてきたのである。三つ年上の兄も、五つ年上の従姉いとこも、みな啄木の歌の愛好者であり、私は、兄や従姉の持っているものでなく、自分の啄木を自分のかたわらにおきたいと願つて、自分の小づかいで一冊を求めた。

大海だいかいにむかひて一人(ひと)

七八日ななようか

泣きなむとすと家を出でにき(へ)

この歌など、なんどとなく口ずさみ、胸にきざみ、修学旅行で、千葉や湘南の海などに行くと、友だちとはなれて、足もとによせてかえす波を眺めながら、この歌を思い出していた。

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来たれり

啄木は明治十九年に、岩手県の盛岡に近い村の常光寺で生まれた。育ったのは、奥州街道に沿う渋民村である。父がその村の宝徳寺の住職に転じたのであった。

村にただ一つの寺の息子、小学校から盛岡中学へ進んだ秀才として、人びとから畏敬の念で迎えられ、両親からも期待された啄木は、進級するにつれて、文学への目覚めとともに成績が落ち、カンニングが見つかって中学校を退学、十六歳で上京した。当時、新詩社を起こして、『明星』を発行、詩歌壇にはなばなしい活躍を続けていた与謝野鉄幹、晶子夫妻の門をたたき、作家としての第一歩をふみ出したが、それから十年、二十六歳で肺結核にたおれるまで、その短い生涯は、失業、病氣、家の没落、愛児の死、家族間の不和など、経済的にも精神的にも、あらゆる

辛苦しんくをなめた。

その歌は、それらの不幸の連続と、挫折ざせつのくりかえしの中から、清冽せいれつな泉のようにほとばしり出たものである。

人生を生きるのに、多くひとは、幸福であるよりは、不幸な状態をかかえこんでいる。若者も老いた者も、それなりの悩みと悲しみに胸をかきむしられ、ときに生きているのがいやになったりする。

啄木はその息いきつく間まもないほどの波しぶきをあげて、おしよせてくる辛酸しんさんきわまりない自分の人生を、作歌の中に歌いこんで、自分の救済きうさいとしたが、それはまた、世の多くの不幸な魂たましいの救済にもなったのではないだろうか。

ある秋の日、私は渋民村しぶたみむらを訪ねて、北上川きたがわのほとりのその歌碑かひの前に立った。
大きな自然石の上には、

やはらかに 柳(お)あをめる

北上きたかみの岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

啄木がふるさとを出てから、望郷の思いに駆られた歌がぎざまれてあり、西に岩手山を、東に姫神山を仰いで、少年の日の啄木も、ちようどのあたりから、あの山々を眺めいったにちがいないと、感慨無量であつた。

啄木はそのなつかしいふるさとを「石をもて追はるごとく」出たと歌っている。

激しい一本気な性格であつたから、人との間にもめごともなくさんあり、住職としての父の失敗もあつて、一家は渋民村にいらなくなるのだが、死ぬまでの十年の間に、いくどか上京と帰郷をくりかえし、北海道にわたつて、函館、小樽、釧路と住まいや仕事をかえている。

渋民は、来り去る旅人のための宿場であつたが、啄木の一生もまた、旅から旅に過ぎた。

しかし、ところをかえ、職場をかえたことが、どんなにかまた、啄木の詩魂をゆたかにあざやかにみがきあげていったことか。

若い日の頃から今もお、私は旅の空にあつてふるさと思ひ、旅先で出あつたひとをなつかしむ啄木の歌にひかれる。

病のごと

思郷のころ湧く日なり